

〈研究論文〉

長崎とダークツーリズム —東アジアにおける経済と地域協力の視点から—

山本 裕*

East Asia is one of the regions that experienced rapid economic growth in Japan, the Miracle on the Han River in South Korea, and the economic development of Taiwan, followed by China's open-door policy widely spreading to the coastal states, and has experienced most rapid economic growth worldwide. The growth is not limited to the transfer of production, but also fosters a middle class and creates its own market. Furthermore, tourism resources have been developed, leading to a leap forward in the tourism industry. Tourism is not limited to sightseeing tours, but also includes memorials and monuments that look back on past wars and incidents, some of which have been designated as World Heritage sites. This study is a part of Nagasaki and Peace Studies since last year. In addition to the sites, Nagasaki has many former coal mine sites, which are also deeply involved in the conscription issue. Thus, it is understood that deepening Nagasaki and Peace Studies will lead to dark tourism. The presentation will mainly focus on Nagasaki and dark tourism as a case study of regional cooperation in East Asia.

はじめに

東アジアは1960～70年代の日本の高度経済成長や80年代の韓国の漢江の奇跡と台湾の経済発展を経験し、90年代後半になると中国の開放政策が広く渤海湾沿岸の沿海州にも及び、東アジアは世界的にも急速に経済成長を遂げた地域の一つと言える。経済成長は、先進地域からの技術や生産の移転に留まらず、中間層を育み、自らがマーケットを形成するまでになった。さらに、海外渡航だけではなく、自国の観光資源の整備も行われ観光産業の飛躍にも繋がっている。ツーリズム（観光）には、物見遊山

的なものだけではなく、過去の戦争や事件などを振り返る遺構や記念碑なども対象となり、なかには世界遺産に指定されたものもあり、近年ではダークツーリズムとして訪問者の姿勢の在り方も議論となっている。

研究の端緒は、昨年来のテーマである長崎と平和学である。長崎には世界遺産の他にも炭鉱の跡地も多く、徴用工問題にも深くかかわることになる。このように、長崎と平和学を深耕すれば、ダークツーリズムに繋がることが理解できる。本稿は、東アジアの地域協力の事例として、長崎とダークツーリズムについて考察する。

*本学経営学部国際経営学科教授

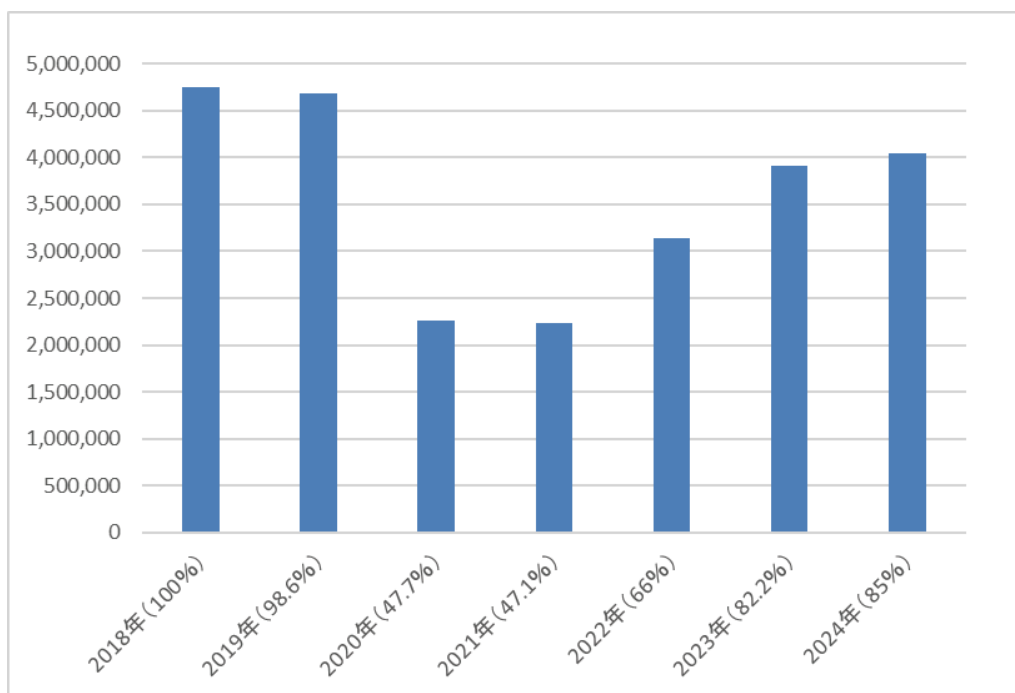
1. 長崎県内の観光の現状

昨年（2024年）は被団協がノーベル平和賞を受賞したこともあって、例年以上にナガサキ・ヒロシマがメディアに取りあげられ、内外から注目された年でもあった。一方で、コロナの終息を受けて、観光県でもある長崎の自治体は、世界遺産などのアピールに力を注いでいる。実際に、平和公園や原爆資料館、さらに、産業遺産である旧炭鉱跡の端島などにも多くの観光客が訪れている。観光の復興は県内消費を高め、所得効果や雇用創出効果にも繋がるとの

見方もある。他方、受難の地である長崎は鎮魂や祈りと切り離すことはできず、商業主義的な観光との共存が大きな社会的なテーマとして残る。

長崎県のコロナ以降の観光客数の推移を表したものが図表1である。18の主要な観光地を指標としているが、2018年を100とすると、2023年は82.2、2024年には85まで戻っていることが分かる。これにインバウンド・クルーズの長崎港、佐世保港への寄港回数を加味すると観光客はほぼ戻ったと言ってよい。

図表1 長崎県内の観光客数の推移



出所 ながさき経済 web（長崎県内主要経済指標 2025 年 7 月 1 日更新版）より筆者作成。単位は（人）。

2. 潜伏キリシタン関連遺産とダークツーリズム

ダークツーリズムと「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」(以下、「潜伏キリシタン関連遺産」)¹との関係性は、歴史的な迫害の記憶と観光としての再解釈という観点から深く結びついていると言える。

(1) 潜伏キリシタン遺産は「苦難の記憶」の象徴

「潜伏キリシタン関連遺産」は、江戸時代のキリシタン禁制下で、信仰を密かに守り続けた人々の痕跡を今に伝える世界遺産である。つまりこの遺産は、「迫害された人々の生存戦略」と「信仰への執念」という、人間の極限状況を伝える遺構であり、ダークツーリズムの対象になりうる資産である。

(2) ダークツーリズムとの接点

ダークツーリズムとは、戦争、災害、宗教弾圧など、「悲劇の記憶」を観光の形で訪れることを指す。この定義に照らすと、「潜伏キリシタン関連遺産」は以下の点でダークツーリズムと関連する。

- ・ 宗教弾圧という負の歴史に基づいている。
- ・ 訪問者が「苦しみの記憶」に直面する機会を提供する。
- ・ 信仰を守るために命を賭けた人々への追体験的理解を促す。

(3) 観光の中での再解釈とジレンマ

一方で、これらの遺産は「世界遺産」として観光資源化されており、単なる歴史遺構としてだけでなく「魅力的な観光地」としてもPRされてきた。ここに、ダークツーリズムにおける

倫理的なジレンマ(悲劇の商業化 vs 教訓の継承)が生まれる。したがって、「潜伏キリシタン関連遺産」は、宗教迫害という悲劇的な歴史の記憶を現代に伝え、観光を通じてその教訓を問いかける存在になってる²。

(4) 中浦ジュリアン記念公園

世界遺産の構成資産ではないが、同じ長崎県のキリスト教関連として中浦ジュリアン記念公園がある。国道202号線を外海から大島(西海市)方面に向かい、標識に沿って左折すると中浦ジュリアンの生家跡地と、展望台と資料館を兼ねた建物がある。ジュリアンは、千々和ミゲルらとともに、大村純忠らキリシタン大名の名代として天正遣欧少年使節団³の一名となり、バチカンではローマ法王にも謁見し、往復6年かけて帰国した。キリスト教を受容した織田信長とは異なり、豊臣秀吉、徳川家康の治世には禁教令が敷かれ、司祭となったジュリアンは迫害され殉死している(2008年に列福)。

写真1 中浦ジュリアン記念公園



2025年4月19日 山本撮影

中浦ジュリアン記念公園は、とても大型バスで乗り付けるような駐車場のスペースはなく、むしろ、ひっそりと佇んで展示物や生家跡が残

る。西海を臨む展望台に立つと往時を少しだけ忍ぶことができる。ここには商業主義が入り込む隙間はなく、訪問する学生たちの学びの場であり、少人数のグループによる観光がイメージされる。ここで考えたのはダークツーリズムと、鎮魂や祈りのツアーや学習ツアーとの微妙な違いであった⁴。

3. 福岡俘虜収容所第14分所（通称・川棚捕虜収容所）とダークツーリズム

戦争の記憶と戦争捕虜の扱いという視点から非常に重要だと考えられる。特に、オーストラリアやオランダとの歴史的関係も含めて、国際的な意味を持つ場所になっている。

（1）福岡俘虜収容所第14分所とは

第二次世界大戦中、日本は全国各地に捕虜収容所を設置していた。福岡俘虜収容所第14分所は、長崎県川棚町に設置され、オーストラリア・オランダ・イギリスなどの連合軍捕虜が収容されていた。捕虜たちは過酷な労働に従事させられ、十分な食糧や医療も提供されず、多くが亡くなったとされている。

（2）なぜダークツーリズムと関係があるのか

ダークツーリズムとは、「悲劇・死・苦しみ」を記憶・学習するための観光であり、この収容所はまさに以下のような観点からその対象となる。収容所跡地には現在、記念碑が建てられており、追悼や平和教育の場となっている。

写真 2 福岡俘虜収容所記念碑



出所 Google マップ（長崎市内）POW camp Fukuoka 14B.

- ・ 戦争捕虜に対する非人道的な扱いという負の歴史
- ・ オーストラリアなど外国の記憶文化と結びついている（例：オーストラリア人の慰霊訪問）

（３）国際的視点からの注目

この収容所は、オーストラリアなどでは「日本による捕虜虐待の象徴」として記憶されている。一方で日本国内ではあまり知られておらず、その記憶のギャップもダークツーリズム的考察において興味深い材料が提供される。

写真３ 原爆で被災した俘虜収容所



出所 読売新聞 2025年4月23日（デジタル版）。

県内や日本国内では必ずしも関心が高くないため、ここではオーストラリア戦争記念館（Australian War Memorial, AWM）について紹介する。記念館には、福岡俘虜収容所第14分所（川棚捕虜収容所）に関連する貴重な資料が所蔵されている。これらの資料は、第二次世界大戦中に日本の捕虜収容所で過ごしたオーストラリア人捕虜の体験や、戦後の記憶継承に関する研究に有用である。

捕虜収容所第14分所の写真（1983年）

AWMのコレクションには、1983年に撮影された「Site of former prisoner of war (POW) camp 14, Nagasaki」という写真が含まれている。この写真は、長崎県川棚町にあった第14分所の跡地を示しており、収容所の位置や周辺環境を視覚的に理解するのに役立つものである。また、福岡キャンプ No.7B の連合軍捕虜のグループポートレート（1945年8月）は、AWMのコレクションにあり、福岡キャンプ No.7B に収容されていた連合軍捕虜のグループポートレートも含まれている。これらの写真は、捕虜たちの生活や戦後の解放時の状況を知る手がかりとなる。

写真３ 原爆で被災した俘虜収容所



“Group portrait of Allied prisoners of war (POWs) believed to be in Fukuoka Camp No 7B, just after ...” The Australian War Memorial. (Access on 28 April, 2025)

写真には以下のような説明書きがなされている。

＜訳＞日本降伏直後、福岡収容所7Bにいたと思われる連合軍捕虜の集合写真。グループには、おそらくオーストラリア人と思われる、スラウチハットをかぶった男性が多数含まれている。左から8番目に座り、赤十字の腕章をして

いるのは、病室係のブルース伍長。彼らの後ろにある建物に寄りかかったはしごに注目された。このはしごは、日本人の元収容所看守が、通過する米軍機に収容所を知らせ、この地域の収容所に必要な物資を投下できるようにするため、黄色のペンキで「PW」の文字を描いていた屋根に通じている。ペンキを塗った翌日、航空機は収容所近くの空き地に食料とベティ・グラブルの写真を投下し始めたとしてされている。

捕虜と抑留者に関するオーストラリア国内収容所の記録

AWMの資料には、オーストラリア国内収容所に収容された敵国捕虜と抑留者に関する「服務及び損耗」書類（Form A112）登録簿や、関連報告書類が含まれている。これらの文書は、捕虜の身元情報や健康状態、移動歴などを詳細に記録しており、川棚捕虜収容所での体験を知る手がかりとなる。川棚捕虜収容所での体験や、戦後の記憶継承に関する研究にとっても重要な資源となる。特に、捕虜たちの生活や解放時の状況を知るための視覚的資料として、また、捕虜の詳細な情報を得るための文書資料として活用できる。

（4）ダークツーリズムの視点とは

長崎県にある他のダークツーリズム地点（原爆資料館、平和公園、潜伏キリシタン遺産など）と並列して俘虜の跡地や歴史は分析が可能と考えられる。「加害者としての日本の歴史認識」や「記憶の継承のあり方」を論じる視点が強調できる。今後は、外国人観光客による訪問動機と、その受け入れ方を比較研究するのも興味深いテーマとなる⁵。

4. 済州島事件とダークツーリズム

この事件は韓国近現代史において非常に重要かつ悲劇的な事件であり、ダークツーリズムの視点から分析することは、歴史の記憶、癒し、そして政治的意味を問う有意義な試みである。長崎のダークツーリズムとは異なる視点も得られるため、本稿でも簡単に考察することにした。

（1）済州島事件とは

事件の背景としては、南北分断と米軍政の影響下で、南朝鮮単独選挙に反対した済州島の一部住民と、韓国政府・警察・軍との武力衝突が発生。衝突やその影響は断続的に続き、済州島事件の一般的な期間は1948年から1954年とされる。実際の被害としては、数万人規模の民間人が殺害されたとされ、「済州島の虐殺」とも呼ばれている。長く国家によって言及が禁じられ、「沈黙の時代」とも呼ばれてきたが2000年代以降、真相究明と和解への動きが進む。

（2）ダークツーリズムの視点での分析

「暗い歴史」へのアクセス

済州島事件は、典型的な「ダークツーリズム」の対象である。観光の目的が、犠牲者の追悼、記憶の継承、そして教訓を得ることができる。

- ・済州4・3平和公園（Jeju 4.3 Peace Park）：記念館、慰霊碑、教育資料が展示され、事件の全貌を学べる。
- ・虐殺があった村跡（如意洞など）：廃墟や慰霊塔が残る場所に立つことで、直接的な記憶と向き合う機会を提供。

記憶の政治とナラティブ（物語）の構築

国家による長年の「沈黙の強制」により、事件は一種の「記憶の空白地帯」となっていた。

そのため、ダークツーリズムは「語られなかった歴史」を市民が主体的に再発見・共有するプロセスの一環と見なせる。公共的な記憶の場を観光資源として再構築することは、過去の再評価にもつながる。

倫理的ジレンマと観光化の危険性

ダークツーリズムには、しばしば「悲劇を消費する」という倫理的なジレンマがある。済州島でも、過度に商業化されたツアーや、被害の軽視・歪曲が懸念されている。ただし、地域主導の追悼ツアーや教育プログラムによって、尊厳を守りながら記憶を継承する努力も続いている。

地域社会との関係性

済州島の住民の中には、いまだに「語ることができない」人々がいるとされる。したがって、観光客はこの場所でのふるまいに対して高い感受性と敬意をもつ必要がある。また、地元と観光客の間で記憶と学びを共有する場が創出されることが、持続可能なダークツーリズムにつながる。

文学作品にみる済州島事件とダークツーリズムの視点

2024年にノーベル文学賞を受賞したハン・ガンは光州事件をテーマにした、『少年が来る』に続いて、済州島事件をもとにした『別れを告げない』を書いている。物語の中に事件と登場人物が巧みに織り込まれ、読みにくさもあるが、ハン・ガンは「個人が受ける小さな傷と社会や歴史が全体として負っている大きな傷を決して分けていなくて、両方が接しているような傷の全体像を描いている作家」であり、文学との関係は「韓国社会が広大な傷であり、その上

を文学者がそれぞれの道を作って歩いてきたようなところがある」(引用は、斎藤・宮地(2025))。済州島を実際に訪問すると韓国のどこにでもある街並みや市場に遭遇する。しかし、4.3平和公園を訪れると、他とは全く違った空間が現れる。沖縄の平和記念公園や摩文仁の丘を思わせるように厳かで、国の贖罪の意識の表れでもあると感じたが、同時に、あまりにも整然とし過ぎている印象も残った。

写真3 原爆で被災した俘虜収容所



2025年6月13日 筆者撮影。

済州島事件をダークツーリズムの視点で見ることで、単なる「歴史的悲劇」ではなく、記憶の政治、和解のプロセス、地域との対話といった多層的なテーマを掘り下げることが可能となる。この地に足を運ぶ行為は、歴史を知り、被害者を追悼し、そして現代社会のあり方を考える契機にもなる。

むすびにかえて

長崎の原爆記念館では国内外からの訪問者の多くは展示物の前で立ち止まり、あるいは、沈黙を保ち、訪問の後にも多くを考え、自分の体験を他の人にも伝えることであろう。また、潜伏キリシタンが神父に信仰を吐露した大浦天主堂でたたずむと、200年以上に及ぶ苦労と信仰の強さに思いを馳せない者はない。今回の考察から得られた知見は、ツーリズムの中でも訪問者を圧倒するほどの対象では、あえてダークツーリズムの概念を持ち出す必要もないことである。むしろ、小規模で特別な環境に置かれた対象ほどダークツーリズムの概念が重要さを増すと考えられる。また、長崎の端島や新潟県の佐渡島では、徴用工の扱いをめぐる日韓双方が納得のいく見解に至っていない。このようなケースでは、現地の評価や解釈が、より訪問客に委ねられることになる⁶。

注

- 1 英文表記では、“Hidden Christian Sites in the Nagasaki Region”。
- 2 「潜伏キリシタン関連遺産」の指定にあたって、国や県はイコモスの意向に沿うようストーリーを作り直したり、構成を変えたりと、必ずしも現地の意向が認められた訳ではない。そこには覇権主義時代からの欧州の姿勢も見え隠れするが、本稿では深入りはしない(井出(2021)107～124頁)。
- 3 英文表記は、“Tenshō Embassy Have”(The Four Members of the Tenshō Embassy Have an Audience with the Pope)。
- 4 ストロームは、訪問するにあたって、敬意(respect)や繊細さ(sensitivity)の他にも、事前調査の重要性を掲げている。Janice J. Strom (2024) p9.
- 5 戦時下の日本軍の捕虜が過酷な労働を強いられ、多くの犠牲者が出た例は映画にもなった泰緬鉄道が有名だが、佐世保の相当ダムでは米軍の捕虜53名(日本人14名)が亡くなり、毎年米海軍と海上自衛隊が慰霊祭を行っている(長崎新聞デジタル版 2025年5月25日)。なお、相当ダムでは朝鮮

人の強制労働の実態も明らかになっている。

- 6 今回、研究の一環で韓国も訪問したが、韓国人の基層をなす「恨(ハン)」についてたびたび考える機会があった。私の理解は、度重なる不幸や不条理を受任する映画「春香伝」の底流にあるエートス(精神構造)がそのイメージである。一方、日本人のエートスを表すのは「忠臣蔵」であり戦後の任侠映画でもある。同じ儒教の影響を受けた国であっても、韓国の中心は親に対する「孝」であったが、日本のそれは忠臣蔵に見られた「忠」であり、戦前は国家に強いられ天皇制に対する擬制的な「忠」であった。それに変化が見られたのが「ヒロシマ・ナガサキ」である。武力を基にした忠から、不条理を受任する恨への変容である。被爆の惨劇の経験が日本人をしてあらたな思想的な高みに達したと言えるのではないか。他方で、本島長崎市長が殺害されたテロル(フィールド 1994)や街頭演説中の安倍総理の殺害も起こり、戦後の日本社会に非暴力が浸透したとは言い難い。

参考文献

- 朝日新聞「爆心地1.7キロ収容地 伝えたい」
2021年5月5日(デジタル版)。
- 朝日新聞「私は被爆者 語る元捕虜」2014年8月4日(デジタル版)。
- 井出明(2021)『悲劇の世界遺産 ダークツーリズムから見た世界』文春新書。
- ハン・ガン 井手訳(2024)『少年が来る』第2版 CUON.
- ハン・ガン 斎藤訳(2024)『別れを告げない』白水社。
- 斎藤真理子・宮地尚子(2025)「傷の痛さ、雪の白さ(対談)」『ユリイカ 2025 1』青土社。
- ノーマ・フィールド(1994)『天皇が逝く国で』みすず書房。
- 読売新聞「「俘虜収容所銘板」移設へ」2025年4月23日(デジタル版)。
- Janice J. Strom (2024) "Dark Tourism" Independently Published.

資料

Site of former prisoner of war (POW) camp 14,
Nagasaki

Group portrait of Allied prisoners of war
(POWs) believed to be in Fukuoka Camp No
7B

Australian prisoners of war: Second World
War - Prisoners of the Japanese, Japan
(2025年4月20日アクセス)

https://nagasaki-keizai.jp/other/nagasaki_economic_indicators/11496 (2025年7月4日
アクセス)

